饒速日命は、さびしく、ただ自分の名のために戰ふ長髓彦をながめておいでになりました。
やがて長髓彦の息はたえました。
天つ神のおん加護の、かがやく金鵄におそれをいだいたまま、空をつかんで、はげしくもだえ苦しみながら。
全軍をおまとめになつた饒速日命は、その翌日、日のみ子さまの軍にご歸順あそばしました。
日の軍の、これが最後の大戰であり、そして、金鵄こそは、天つ神の、み子をめぐみたまふ大きなみ心のあらはれの、目もくらむほどの、かがやきでありました。

【日本書紀】

昔、孔舍衙の戰に五瀨命矢に中りて薨りましき。天皇御みもちたまひて、常に憤懟を懷きたまふ。此の役に至りて、意に窮誅さむと欲す。乃ち御謠して曰く、

ミツミツシ　クメノコラガ　カキモトニ　アハフニハ　カミラヒトモト
ソノガモト　ソネメツナギテ　ウチテシヤマム。

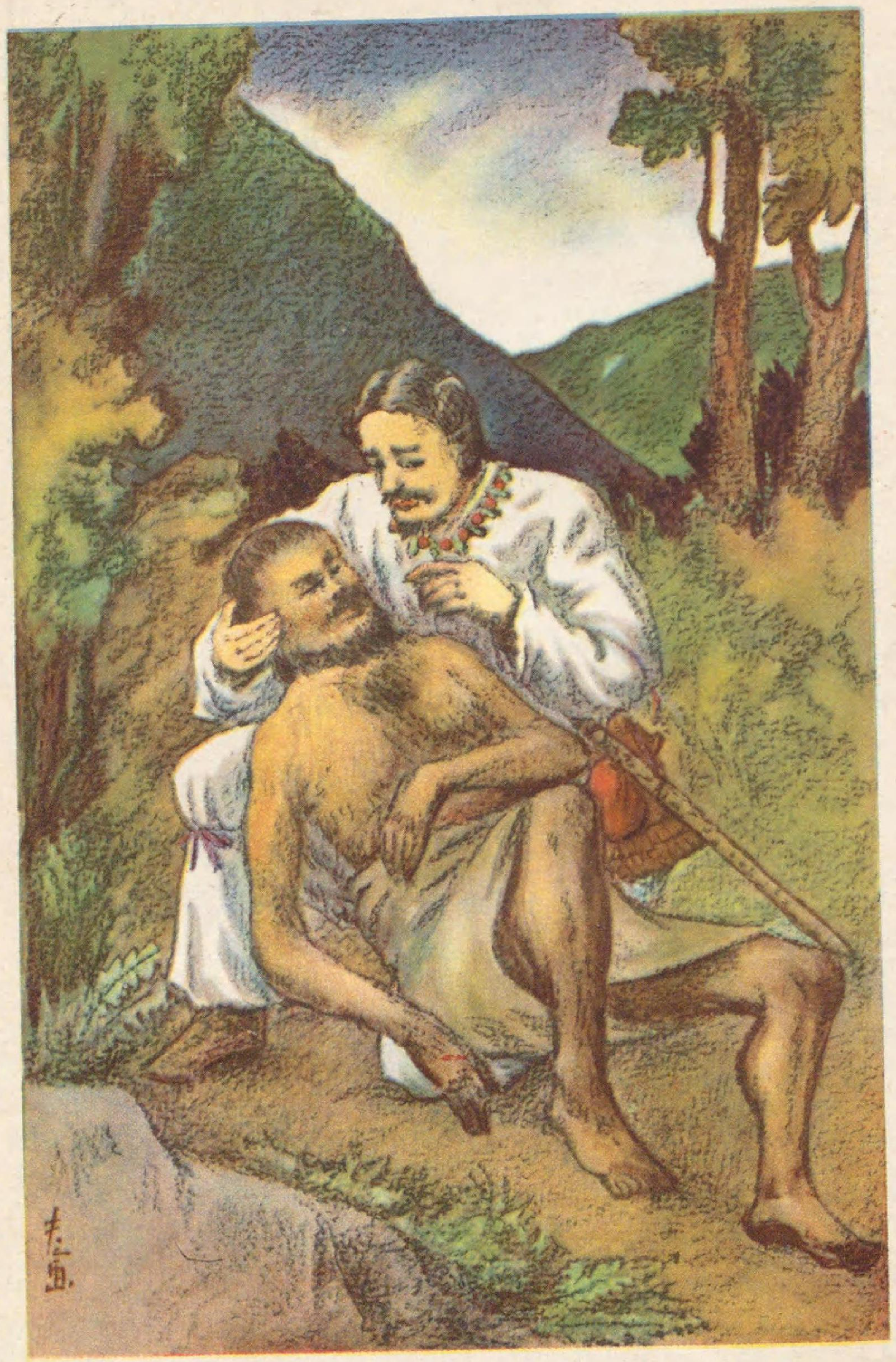
又謠ひたまはく、

ミツミツシ　クメノコラガ　カキモトニ　ウエシハジカミ　クチヒビク
ワレハワスレズ　ウチテシヤマム。

因りて復た兵を縱ちて忽に攻めたまふ。凡て諸の御謠をば皆來米歌と謂ふ此れは歌へる者を的取して名づくるなり。時に長髓彦、乍ち行人を遣して天

皇に言して曰さく、嘗、天神の子有まして、天磐船に乘りて天より降止ませり。號を櫛玉饒速日命と曰す。是れ吾が妹三炊屋媛を娶りて、遂に兒息を有ましむ。名をば可美眞手命と曰す。故に吾れ饒速日命を以て君と爲て奉へまつる。夫れ天神の子、豈兩種有さむや。奈何ぞ更に天神の子と稱り、以て人地を奪はむや。吾れ心に推しはかりみるに、未必爲信。天皇曰く、天神の子亦多にあり。汝が君と爲る所、是れ實に天神の子ならば、必ず表物あらむ。可相示之。長髓彦卽ち饒速日命の天羽羽矢一隻及び步靫を取りて、以て天皇に奉示る。天皇覽そなはして、事不虛也と曰ひて、還して、御せる天羽羽矢一隻及び步靫を以て長髓彦に賜示ふ。長髓彦其の天表を見て、益、踧踖を懷く。然れども凶器己に構へて、其の勢中に休むることを得ず。而して猶迷圖を守りて、復た改意無し。饒速日命、本より天神の慇懃に唯天孫に是れ與したまふことを知れり。且つ夫の長髓彦の稟性、愎佷、教

ふるに天人の際を以てすべからざることを見て、乃ち殺しつ。其の衆を帥ゐて歸順ふ。天皇素より饒速日命は是れ天より降れりといふことを聞しめせり。而して今果して忠効を立つ。卽ち褒めて寵みたまふ。此れ物部氏の遠祖なり。



土（つち）

キジムシロは、春の野に、日の光をよぶ花です。

丘陵には、まだ霜柱が高くするどく凍てついてゐましたが、じんじんと、わいてくる春のけはひは、その花の芽にじゆうぶんでした。

夜があけて、にぶい朝の陽が、ななめに木の間をとほして、ここまで流れてゐました。

高尾張の土蜘蛛の邑です。

丘陵に、ふかく横穴をうがつて、その入口に獸の皮をつるしただけの、家とも見えない家が、ずつとならんでゐます。

朝の陽は、もう、そのどの家の入口にも、とどいてゐました。

獸の皮からは、やうやう氷つた霜が、今とけはじめたらしく、皮をつたつてゆれのぼつていく水蒸氣が、ほんのりと、やはらかく見えてゐました。

「起きろよ。起きろよ。」

地面をはふやうに、一人の土蜘蛛が、朝をしらせてよび歩いてゐました。

立つてはゐるのでせうが、小人のやうに身體が小さく、そのわりに手足のずんと長い土蜘蛛の姿は、無氣味で、無恰好で、おどけてゐて足音を聞いてさへ、身の毛のよだつほど、うすぎたなく思はれるのです。

「おう。」

「おう。」

「おう。」

どの穴からも、しやがれた、めうに老人くさい、かれた返事が聞えました。

やがて、まうしあはせたやうに、ごそ〱とはひ出してくる土蜘蛛が、一つところに顔をそろへました。

どの顔も、黄色い、皺のふかい、どんよりとにごつた血の色です。毛でうづもれた顔に、眼ばかり光つて、まるで蜘蛛のやうでした。

「おう。」

「おう。」

「おう。」

長いかた手をさしあげて、土蜘蛛は、あいさつをかはしました。

朝日を、をがむことを知らない土蜘蛛の一隊は、目をぱち〱とさせただけで、くるりと右を向きました。

水越峠へ、朝の獵に出かけるのです。

石の刀、石の槍、弓などをせおつた土蜘蛛が、先頭に立ちました。

やせて、つかれの見える男です。

犬のやうに、手足で歩いて行きます。

つづいて、鹿の皮で作つた着物を着て、よくこえた男がつづきました。もり〱と力のもりあがつた男です。

つづいて、男がおよそ十人はゐました。だれもかれも、みんなよくにた無氣味さです。

つづいて子供が同じほど。これは、まるい素焼の酒壺をもつてゐました。

一隊は、にぶい朝の陽の中を、さむ〲と、小さく、丘陵をおりて行きました。

「病人はまだ死なないのか。」

鹿皮を着た男が、犬のやうにはつて行く男に聲をかけました。少しの思ひやりもない、腹だたしいやうな聲でした。

「まだ。」

小さく、つかれきつた男は、ふり向いて返事をしました。

「歩け。たちどまる必要はない。聲だけ聞けばよいのだ。」

ぽんと足げにして、鹿皮の男は、かみつくやうに叫びました。

「殺せ。殺してしまへ。なぜ老人などを大事にするのだ。しかも、病みついて三月近くにもなる。おれたちの國では、役に立たなくなつた老人は、すべて山にすてるか、なぐり殺すことにきまつてゐる。さうだらう。」

「はい。」

「自分の力で、たべることの出來なくなつた者は、とつとと死んでしまふがいいのだ。死ぬ力さへない者は、おれが木につるして殺してやる。どうだ。山へすてるか、それとも殺してしまふか。」

「はい。」

「はいではない。どちらか返事をするのだ。」

鹿皮の男は、又かみつくやうに叫ぶと、その男を、強く、足でけたふしました。
「ゆるして下さい。ゆるして下さい。」
「返事をすればいいのだ。返事をすればゆるしてやる。どちらだ。」
「病みついた父を、ゆるしてやつて下さい。」
「なに！　病人をゆるせ？　おまへは、俺たちの掟をやぶるつもりか。働けない者に、大事な俺たちのたべものを、わけようといふのか。」
「だから……だから、私が二人ぶん働いてゐます。弓矢を、刀を、槍をせおつてゐます。夜どほし看病して、そのつかれた身體に、も一つの働きを加へてゐます。父のぶんです。せおつたぶんは、父の働きでございます。」

「馬鹿をいへ。おまへは、鹿一匹さへとることの出來ない男だ。鳥一羽さへ射殺すことの出來ない男ではないか。その償に、弓矢をせおはせてゐるのだ。」
「はい。」
「病人は鬼だぞ。おれたちの世界へ『死』をふりまく鬼だぞ。一日も生かしておけぬではないか。……それとも、俺たちみんなが死んでもいいと思つてゐるのか。」
「と、とんでもない。」
「さうではないか。老人が病氣をする。おまへもその鬼にとりつかれて病氣になる。隣りの男、その隣りの男――鬼は、やがて、みんなをくつてしまふ。おそろしいことだ。ひよつとすると、おまへもすでに

鬼になつてゐるのかも知れないぞ――おい！ 顔を上げて見よ！」

つかれた男は、力なく青ざめた顔を上げました。

「それ見ろ！ 鬼だ！ 鬼だ！」

「あゝ！ 私が……鬼！ 鬼！。」

がたがたとふるへながら、その男は、鹿皮の男の足にとりすがりました。

「た、たすけて下さい。私は生きてゐたい。私は鬼になりたくない。」

「よし！ だから、今のうちに老人を殺してしまへ。さうでないと、とんでもないことになるぞ。」

「だが、私は父を殺したくないのです。よくなります。きつとよくなります。私の一心でよくしてみせます。」

「一心で……。」

「はい。父は私にとつて、鹿の皮より尊いのです。猪のきばより尊いのです。私のたつた一つの寶なのです。掟は知つてゐます。だが、きつとなほしてみせます。なほればいいのです。なほれば働けます。自分でたべます。なほれば、掟をやぶつたことにはならないはずです。」

「鬼！ 鬼だ！」

鹿皮の男は、ぴしりと強く、つかれた男の頬を打ちました。

つかれた男は、霜のふかい丘陵の下へ、まつさかさまに落ちこみました。

顔一面、血に染まつて、男は、ぶるぶるふるへながら、丘陵の下から、うめくやうに叫びました。

「父を……。父を……。父を……。」

「勝手にするがいい。今日のわけまへは、わたさぬぞ。さうだ。たべる物がなければ、老人だつて、おまへだつて、やがて死んでしまふにきまつてゐるのだ。勝手にするがいい。ばかなやつだ。さあ、あの弓矢をひろつて來い。鬼の肩からもぎとつてこい。」

うしろの男を見かへつて、鹿皮の男は命じました。

「さあ行かう。陽も高い。おくれた。」

一隊は、なにごともなかつたかのやうに、やがて丘陵のかげにかくれて行きました。

つかれた男は、霜に顔をうづめたまま泣いてゐました。

あたりの霜が、うす赤くそまつてゐました。

「お父さん……。お父さん……。お父さん……。」

男は泣きながら、うめくやうに父を呼んでゐました。

つかれと、空腹と、いたさに、男は立ちあがることも、顔をあげることも出來ませんでした。

丘陵のかげから、この時、一人の男が走り出して來ました。

さきほどから、じつとかくれて、樣子を見てゐたらしく、つかれた男のたふれてゐる丘陵の下へ、ころげるやうにかけおりました。

このあたりでは、あまり見かけない、土蜘蛛とは、ぜんぜん別な姿の男です。

身體がずつと大きく、手足が身體とよくつりあつて、見るからに、

すつきりとした、元氣にみちた男です。
顏も白く、血の色が頰をそめてゐます。
目もすんで、青空のやうにかがやいてゐました。
それに、まつ白な、布で作つた着物を着てゐました。
頸にかけた、青や紅の曲玉が、かち〳〵と、いい音を立ててゐました。
「さあ起きるのだよ。しつかりするのだ。元氣を出して。さあ。」
男はやさしく、土蜘蛛の肩に手をかけました。
「ゆるして下さい……。ゆるして下さい。お父さんを殺さないで下さい。」

「さあ、元氣を出して。わたしだ。わたしだ。」
「お父さん……。お父さん……。お父さん……。」
「うん、だいぶ、つかれてゐるらしい。それに大へんな、けがだ。」
男は、すばやく、腰につるしてゐた袋をはづして、口を開きました。
それから、小さな、まるい藥をとり出しました。
ぐつと、兩手で土蜘蛛の顏をあふ向けると、その口へ、藥をさし入れました。
土蜘蛛は、うすく眼を開きました。どんよりと、うつろな眼です。
「しつかりするのだ。元氣を出せ。お父さんもたすけてやる。いいかだいぢやうぶだ。元氣を出すんだよ。」
男はやさしく、土蜘蛛をゆすぶりながら話しかけました。

「お父さん。」といふ聲が耳にはいつたらしく、土蜘蛛は、ぱつちりと眼をひらきました。

そして、男の顔をじつとながめました。

「あつ！」

土蜘蛛は、はね起きました。見たこともない男です。自分たちとはぜんぜんちがつた男です。

「鬼……。鬼……。」

土蜘蛛は、おそろしさに立つことさへ出來ず、ぢり〱、ぢり〱あとずざりをはじめました。

「鬼ではない。日の民(たみ)だ。安心するがいい。安心するがいい。」

「日の民……。日の民……。」

「さうだ。神さまとともに、大和(やまと)へやつて來た一人だ。」

「神さま……。神さま……。」

「なんにも知らないと見えるな。よしよし、今にわかる。安心するがいい。私たちは、神さまを知らぬおまへたちに、神さまのめぐみを知らせに來たのだ。鬼ではない。おまへたちの味方(みかた)なのだ。」

「私の……、味方……。」

土蜘蛛は、どうしたわけか、はつきりとは、わかりませんでしたが、なにとはなしに、あたたかい、なつかしいものが感じられて、この人は、敵ではないといふことだけが、その顔から、くみとることが出來ました。

日の民の男は、春のやうにあかるく、にこ〱としてゐました。

そして、土蜘蛛を、少しもおそれず、なつかしい友だちででもあるかのやうに、親切に顔をぬぐつてやつたり、手足のきずを手あてしてやりました。

日の民の男と、土蜘蛛とは、つれだつて土蜘蛛の家へ行きました。病氣のために、やせて、つかれきつた老人が、じめ〳〵と暗い穴の中に、横たはつてゐました。むつとする、いやなにほひが、鼻をつきました。

たべのこした、獸の肉と、ひどい熱のために、家の中は、ゐたたまれないほどです。

日の民の男は、老人に藥をあたへ、部屋の中をかたづけ、老人の髪

をきれいにむすんでやりました。

土蜘蛛は、だまつたまま、うなだれて、うしろにすわつたきりでした。

「もう、だいぢやうぶだ。朝晩、これを一つ一つ口の中へ入れてやるのだよ。十日もすれば元氣になるにきまつてゐる。さ、それから……」

と、日の民の男は、小さい、見たこともない種子を、一つかみ、袋から出しました。

「米といふものだ。日の民がたべてゐる、神さまからいただいた寶物だ。これを土の上にこぼしておくのだよ。いいかな。うつすら土をかけておかぬと、鳥が、たべてしまふかも知れないからな。土は、やはらかにしておく方がよい。十一月には、千倍萬倍の種子がとれるぞ。

米といふのだ。今、焼いてみせるからな。たとへば……。」

さういつて、そこにころがつてゐた壺の焼物に米を入れて、火うち石で火をもやしました。

「見てゐろ、すぐにやけるからな。」

日の民の男は、煮えるまでの間に、米の作り方を、いろ〳〵くはしく說き聞かせました。

「さあよし、たべてごらん。老人にあげるといい。神さまからいただいたものだからな。」

老人は、はじめて米をたべました。

「うまい。鹿よりもうまい。雉よりもうまい。猪よりもうまい。うまい。あゝ、うまい。」

老人は、がつ〳〵と、一粒ものこさず、たべをはりました。

「土の上にまくのでしたね。」

「さうだ。」

「だいぢやうぶでせうか。土に力があるのでせうか。」

「ある。土も神さまのものだ。」

「神さま……。いいえ、土は土蜘蛛のものです。この土は私のものです。」

「神さまのものだ。その證據に、おまへたちが植ゑたおぼえのない、草や花が咲く。神さまから下された米がみのる。おまへたちのものならおまへたちの植ゑたものしか出來ないはずだ。なに一つ蒔いたおぼえもないのに、なぜ土の上にこんないろ〳〵な花がさくのだ。」

日の民の男は、二人の土蜘蛛に、神さまの話、日の光、雨のめぐみ、風の力、土の話をいろ〳〵と説き聞かせました。

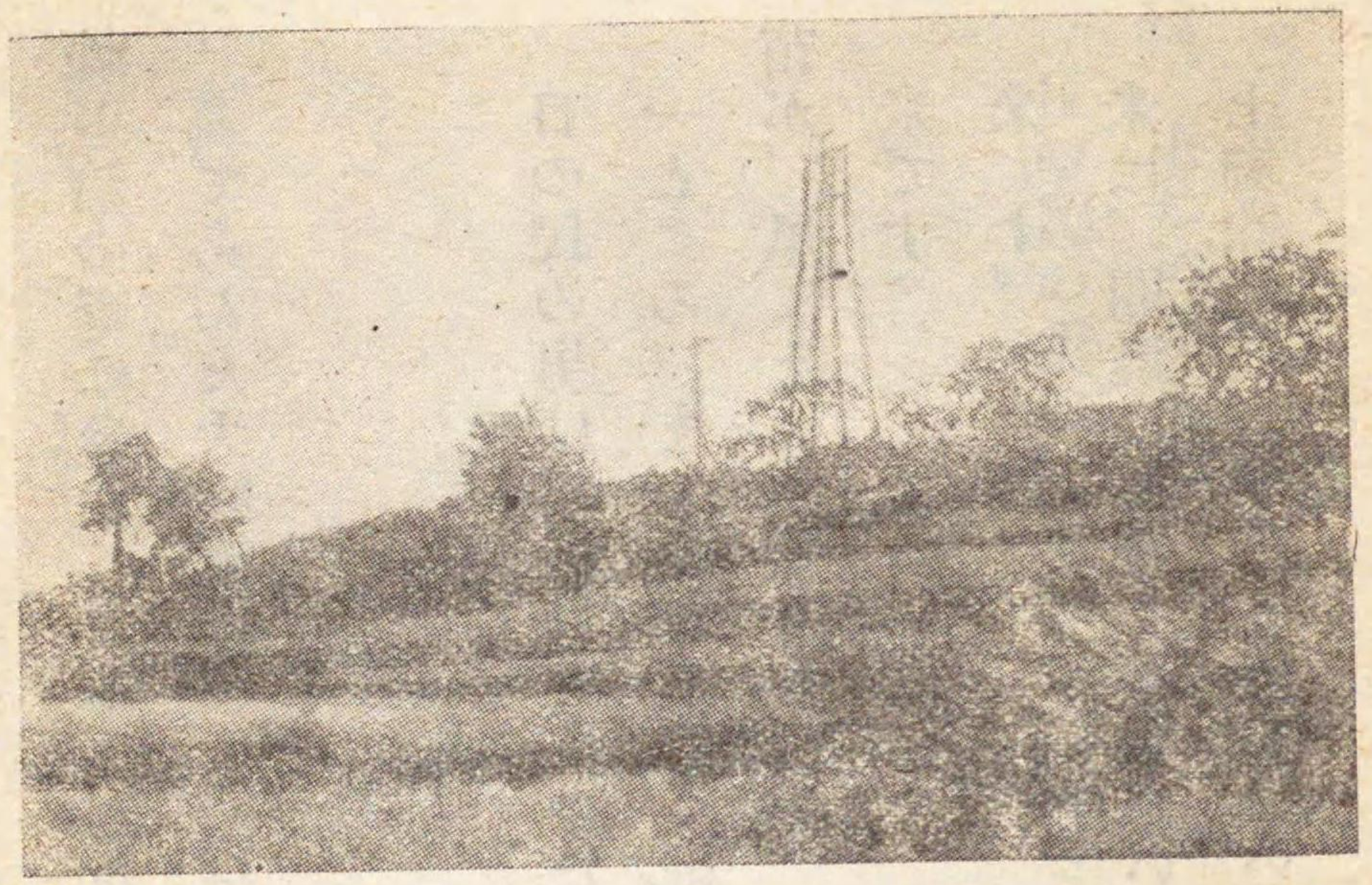
二人の土蜘蛛には、どうしても、それがわからないやうでした。

日の民の男は、晝近く、丘陵を下つて、東へ道を急ぎました。

「今にわかる。土のめぐみが、どんなにふかいものか、あの米が、よく教へてくれるはずだ。父の大事なことを知つてゐる土蜘蛛に、神の尊さのわからぬはずがない。よかつた。ほんとに今日はいいことをした。」

日のみ子さまの、最後のおん戰が、土蜘蛛退治であります。

ご大業ご成就に先立つ二年、長髄彦をご平定あそばした日のみ子さ



和珥坂下傳稱地

まは、のこる土蜘蛛を、一擧にご平定あそばすため、皇軍の陣容をおととのへあそばしました。

二月二十日。

春まだあさい大和の平野を、皇軍は、ひたおしに進みました。

北、波多丘岬の新城戸畔を。

東、和珥坂下の居勢祝を。

そして西、長柄丘岬の猪祝を。

さらに南、高尾張邑の土蜘蛛を。

日の民の男は、この最後の土蜘

蛛退治の軍に参加(さんか)してゐました。
葛(かつら)であんだ大網(あみ)を作つて、皇軍は土蜘蛛を丘陵におそひました。

日の民の男は、戦ひをはつた丘陵を、しづかに歩んでゐました。
一ところ、まつ黒な土の、耕(たがや)されたあとに、青々と芽をふいてゐる苗が、風にそよいでゐました。
米です。
米です。
米は、間違ひもなく芽をふいてゐました。
土蜘蛛が、信ずると信じないとにかかはらず、日の光は、神のみ心は、土のめぐみは、ふかく、尊く、ひろく、かがやいてゐました。
日の民の男は、しづかに頭を下げました。

【日本書紀】

又、高尾張邑に土蜘蛛あり。其の人と爲り、身は短くして手足は長く、侏儒と相類たり。皇軍、葛網を結きて掩襲ひ殺しつ。因りて改て其の邑を號けて葛城といふ。

陽（ひ）

「やがて、春になる。」
大久米命さまは、かげらふのもえはじめた久米の坂をおりて、つい目のさきの、橿原へ、深田池の東の道をとほつて、歩いてまゐりました。

小さな川の中にも、せりがのびてゐました。

掘りかへされてまもない、新しい宮居への參道の兩がはには、名も知らぬ綠の芽が、いつ種子がこぼれたものか、もうすつかりのびて、うら〳〵と陽にかがやいてゐました。

大久米命さまは、その一本ををりとつて、にほひをかいでみました。

あまい春のにほひが、むんと、そのほそい葉にあふれてゐました。

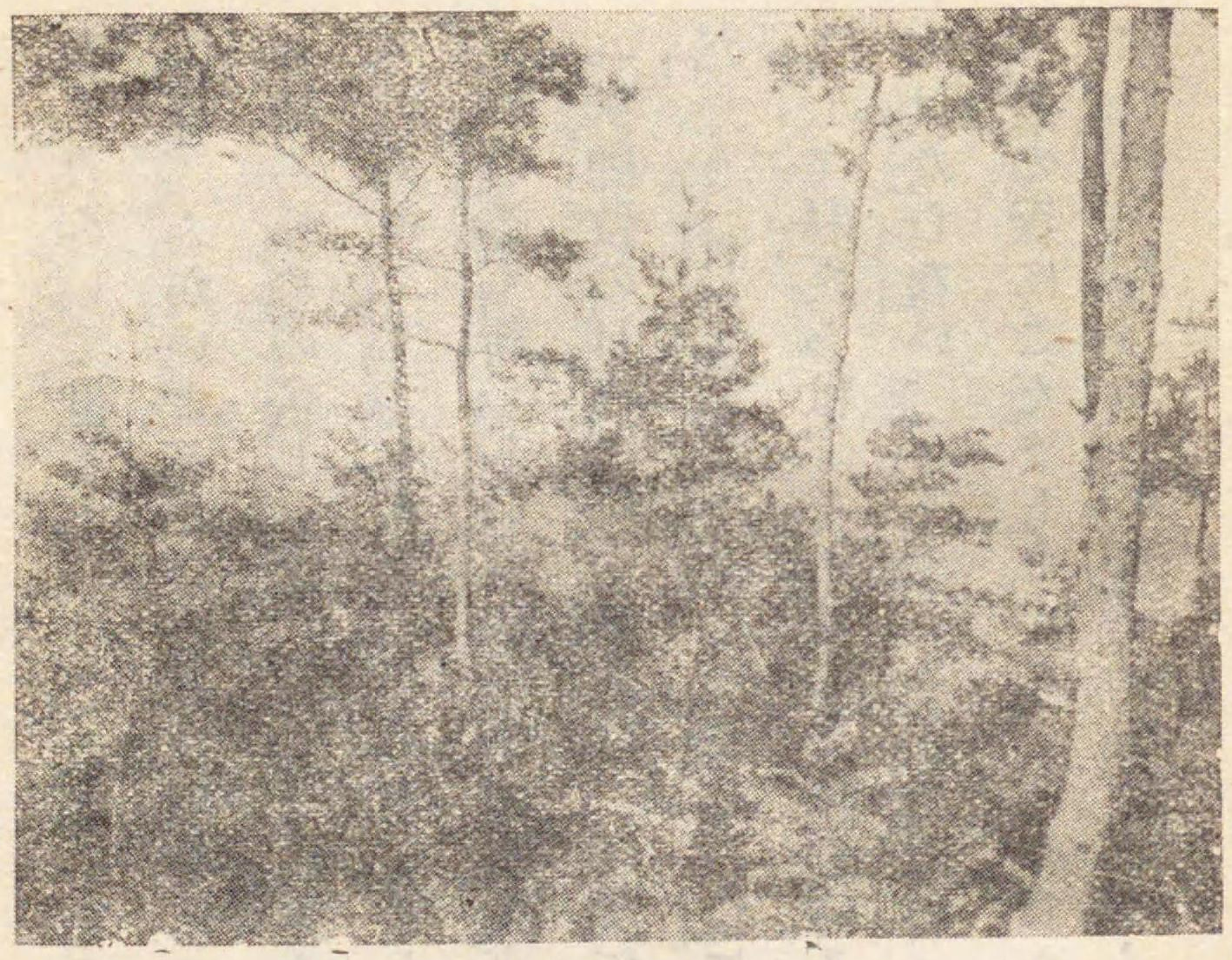
「やがて春がくる。日の國に——日の民に。」

ながいながい、冬ににた苦難の道を、たどつてをられた命さまには、その道が苦しかつただけ、よけいに、今日の、うららかさが、心にしみて、うれしいものでした。

陽の光のよろこびは、はげしい雨にうたれ、身をきる寒さに苦しみながい闇にさいなまれた者のみが、まことに知ることの出來るよろこびです。苦しみが、ふかければふかいほど、そのよろこびは大きいものなのです。命さまの、今の心はそれでした。

まして、日のみ子さまのみ心と、およろこびを思ふにつけ、命さまは、まことに胸のあつくなるのをおぼえました。

「日のみ子さまの、およろこびはどんなであらう。もつたいないことだ。なみだがこぼれる。私さへこんなにうれしいのだからな。」
大久米命さまは、うやうやしく、宮居ををがみました。
そこからは、大和三山が、ついそこに見えました。
「あそこだ。椎根津彦が、埴とりをしたのは。」
天香山(あめのかぐやま)が、ひくく、樫(かし)の林の向かふに、かがやいてゐました。天香山をこえて、とほく菟田(うだ)の山々が見えました。
そこからは、思ひ出のふかい山々が、四方にのびひろがつてゐました。
南へ吉野、西へ葛城(かつらぎ)、北へ生駒(いこま)、そして東へ菟田の山々です。
どの一つの峯にも、谷にも、苦しい戰の思ひ出、進軍の思ひ出がみ


大和三山

ちてゐました。
「だが、すべては思ひ出となつた。今日見えるものは、日の光ばかり、神の光ばかりだ。それでいい。それで、すべての思ひ出は、うれしいものになる。日の民の道は、うれしい思ひ出にみたされて、一歩一歩、光を八紘(あめのした)におしひろめていくのだ。千萬年後まて、私たちの子孫は、苦しみ

苦しみぬいて進んでいくことであらう。しかし、私たちの子孫は、みんな、ふかいよろこびの思ひ出を持つことが出來る。み光を、おしひろめるための苦しみは、私たちにあたへられた、もつとも大きいほこりであり、もつとも正しい道だ。そして、生きがひのある仕事だ。」

木の香も新らしい宮居の千木が、高く青空にそびえてゐました。

「御卽位の日の、あの感涙は、千萬年後の子孫の眞心をうるほすことだらう。日のみ子さまは、天皇のみ位につかせたまふた。神のみ位——そして私たちは、その神のみ位を守る民族なのだ。この光榮をわすれてはならない。」

橿の森にこだましながら、その日からつづいてゐるご奉仕の斧の音が、こーん、こーんと、すみきつて、ひゞいてゐました。

大久米命さまは、池をまはつて、やがてご門の近くに歩みをうつしました。

そこには、まだ、荒い浪路をのりきつた、み船が、たくさんの材木をつんだまま、おかれてありました。み船は、大和に進むと、あるひは、皇軍の糧食をつみ、武具をのせ、あるひは、老人や子供をはこぶ車のかはりに用ひられたのです。

み船のまはりには、齊斧や齊鉏を手にした、手置帆負や彦狹知の家の子が、むらがつてゐました。

大久米命さまと知ると、人々は、みんな斧や鉏をおいて、ていねいに頭をさげました。

人々の顏にも、よろこびがかがやいてゐました。

「ご苦勞だな。」
命は、にこ〳〵として、禮をかへしました。
「ついさきほど、道臣さまが、ご門を、おはいりあそばしました。」
「おう、命さまが。」
「日も夜も、日のみ子さまのおそばをはなれると、み心が落ちつかぬと仰せでした。」
「私も同じことだ。あなた方も同じことだらう。」
「さうです。日の民は、みんな同じ思ひだと、さきほども話してゐたところです。」
大久米命さまは、うなづきました。
「お手傳しようかな。」

來目邑傳稱地

「いいえ、今日は、菟田から弟猾さまの家の子がまゐつてをります。手があまるほどです。」
「手があまる……。さうではあるまい。日の民に、手のあまつたものは一人もないはずだ。石でもいい。草でもいい。日の道を美しくするためには、まだまだそれらをはこび出し、ぬきとらねばならぬ。よし〳〵……。」
大久米命さまは、ご門から東

に、櫻川のあたりに出ました。

「日の道がけがれてはならぬ。長髄彦との戦も、草をひきぬく奉仕も、同じ忠義だ。どれどれ、それでは一本でもよけいに。」

命さまは、そこへしやがんで、だまつて草をぬきはじめました。

生命のあるかぎり、つかへの道を、まつたうせねばならぬ。日の民の、つかへの道には、もう、これでいいといふ、さいげんはない。命さまは、いつもさう考へてゐました。

初春とはいひながら、汗ばむほどの陽の光でした。命さまは、ひきぬいてゐる草の上に長い人影を見ました。

「おや……。」

不思議におもつて顔を上げました。

「たれだらう。

草をぬいてゐる男がゐました。だまつて、うつむいて。

命は、立ちあがつて、その男に聲をかけました。

「たれでせう……。」

男はふりかへりました。弟磯城です。

「おゝ！」

二人は同時に頭をさげました。

「弟磯城ではないか……。」

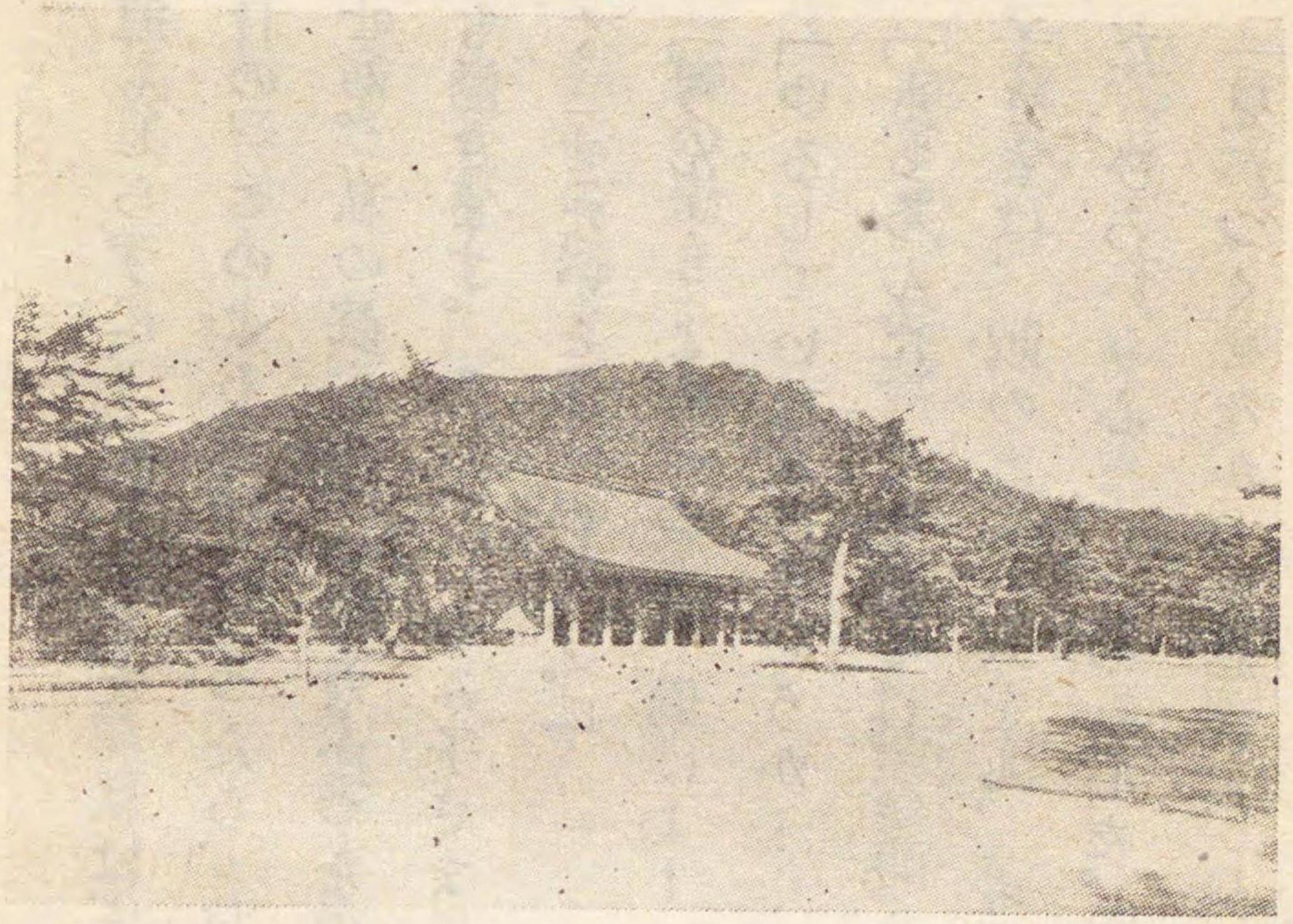
「命さまでしたか。」

「草をひいてゐたのか……。」

「朝まだきから。」

「ほう。」
「毎日です。」
「ほう。」
「命さま、私は、みんなの倍の働きをもつて、つかへたいとぞんじます。」
「倍の働き……。」
「三倍の働きでもいいのです。」
「なぜだ……。」
「命さま、私は、兄のぶんも働きたいのです。」
「兄のぶんも……。」
「兄は、とう／＼日のみ子さまのふかいみ心を知らず、おつかへする

道もしらずに、亡びました。私は、兄をかはいさうだと思ひます。今日の、このよろこびを知つたら、兄もきつと改心したにちがひありません。私の眞心が、たらなかつたのかも知れません。私は、兄のぶんも働きます。そして日のみ子さまに、かげながら、兄にも、忠義をつくさせたいと思ふのです。」
「うん！　よくいつた。働けよ！」
「ゆるしていただけませうか……。」
「もちろんだ。その眞心は、きつと日のみ子さまにも通じる。日のみ子さまは、賊のどの一人をも、お憎みにはならなかつた。ふかいみ心だ。ひろいみ心だ。日のみ心だ。」
「兄がつくせなかつた忠義を、兄のした不忠を、私はとりかへしたい



橿原神宮

と思ひまして、草をひいてゐます。命さま……。」

弟磯城の目は、一ぱいのなみだでした。

「よし！　草をひけ、だまつて眞心から。」

命さまのうしろで、弟磯城は、だまつて草をひきました。

「私も、そのつぐなひのために草をひいてやるぞ。私も二倍働かう。兄磯城のために。」

弟磯城は、うなづいたきりでした。

泣いてゐるのです。

日はうららかに、橿原の宮居を照らしてゐました。

春です。

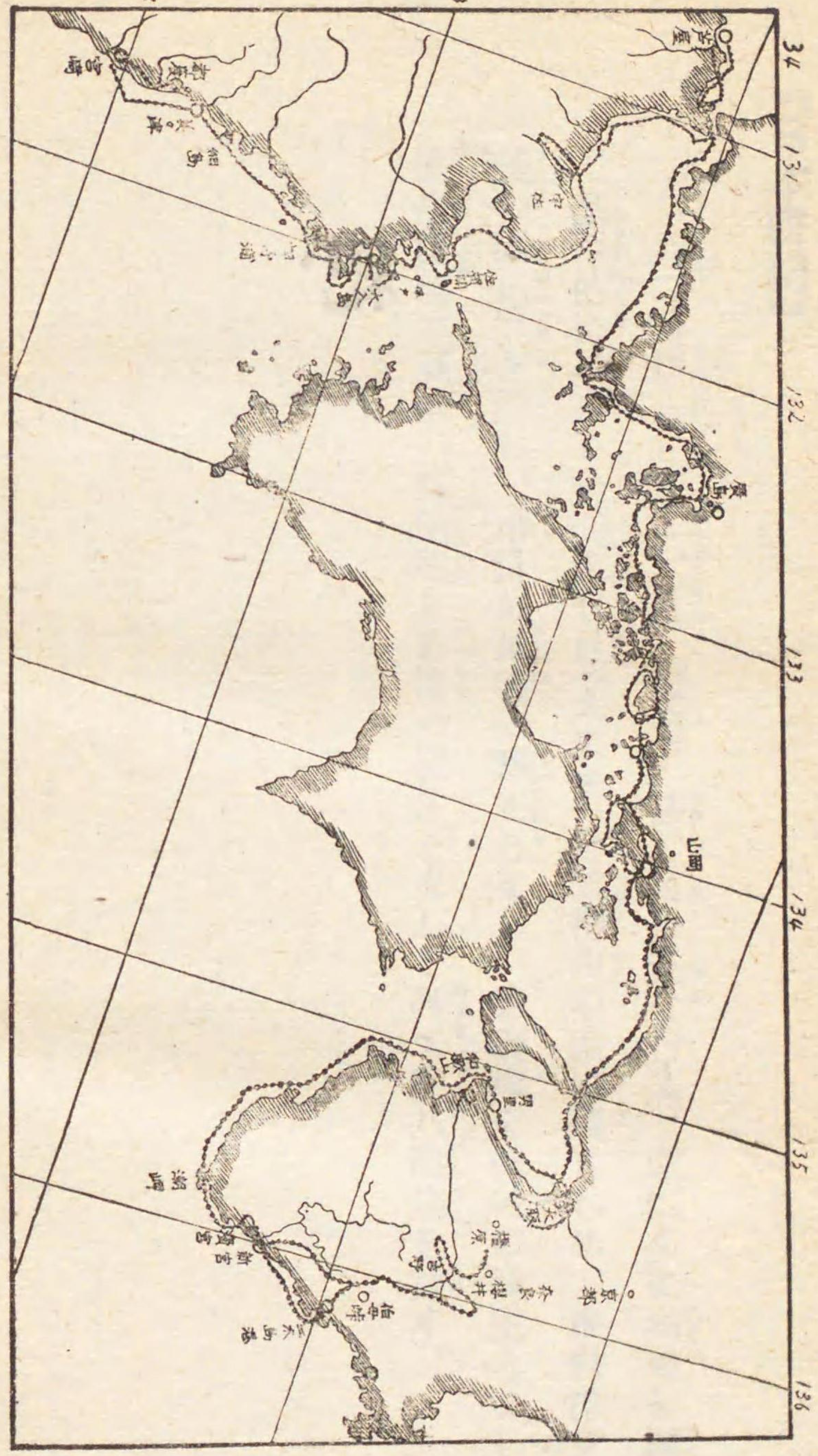
春はもうすぐです。

鳶の聲が、とほく聞えてゐました。

紀

【日本書紀】

二年春二月甲辰朔乙巳。天皇、功を定め賞を行ふ。道臣命に宅地を賜ひて築阪邑に居らしめ、大來目(大久米)を畝傍山の西に居らしめ、椎根津彥を倭の國造となし、弟猾を猛田の縣主となし、弟磯城を磯城の縣主となし、高皇產靈尊五世の孫劒根を葛城の國造となし、并て頭八咫烏を賞す。



【日本書紀によつて、神武天皇御東遷の、みあとを仰ぎたいと思ひます。】

紀元前七年十月五日。美々津港には、糧食、武器などを、ぎつしりのせた、何艘とも知れぬ御軍船が、高く帆をあげました。

東の美地に、無窮の聖業をひらき、天業をおしひろめ、天下を、平けく安らけく作りかためんための、大進發の日です。

空はくまなく晴れ、遠近の山野に、瑞祥みなぎり、見わたすかぎり日向の灘は、水色新たに凪ぎわたつてゐます。

大み舟には、かがやく日のみ子さまの御英姿が、神々しく拜せられ

皇兄彦五瀬命、稲氷命、三毛入野命、皇子手研耳命のみ姿も、日の光にはえて、尊く拝せられました。

御東遷の日です。日の民が、日のみ子を奉じて、日の道をはるかに大和へ、御東遷あそばす日なのです。

天に地に、空に水に　かぎりなく尊いひととき、あゝ、その感激は、いかばかりふかいものであつたでありませう。

日向の島々をぬふて、北へ北へと進むこといく日、はやくも速吸門の難所にさしかかりました。その時、小舟をあやつって漕ぎつぎ、舟をご案内まうしあげ、そのごも生涯忠誠をあらはしたのが珍彦（のちに、とくに椎根津彦の名をたまはる）であります。

潮すぢを、無事にのりきつたみ軍船は、やがて菟狹にご到着、ここ

でも土地の長である菟狹津彦、その妹菟狹津媛の二人が、菟狹川のほとりに、立派な『一柱騰宮』をお造りまうしあげて、皇軍を手あつくおもてなしいたしました。日のみ子は、ことに御滿足あらせられ、媛を、侍臣天種子命の妻として、お迎へあそばしました。天種子命は、中臣氏の遠祖。その子孫は、長く藤原氏として榮えました。

菟狹をたつて、筑前の國の崗水門に入らせたまふたのは、同じ年の十一月九日。しばらく、ここにおとどまりあそばしました。この時宮の名を岡田宮ともまうしあげ、ここでは、宗像族が、一族の水軍をあげて、皇軍にお從ひまうしてをります。

一月ばかりののち、やがて十二月二十七日には、安藝の國埃宮（多祁理宮）の行宮におつきあそばされました。

こえて紀元前六年の春、三月六日には、吉備の國に入らせられ、高嶋宮の行宮におとどまりあそばしました。もはや、めざす大和へは、今少しの船路となりました。思へば、はるかにも、とほいご航海であります。勇士たちの心の中にも、故里の日向の山河は、ゆめのやうにうすれて、今はただ、希望にかがやく大和へのあこがれに、もえしきつてゐます。ここで、大和の様子をご偵察あそばしますと、すでに、長髄彦は、大きな勢をもつてゐました。

ご航海に、いたんだみ船をご修繕し、み劍を磨き、おん武具の手入、ご糧食の整備などに、約三ケ年をおとどまりになつて、大に戰備を、おととのへあそばされました。

紀元前三年、二月二十一日、高嶋宮ご進發。繪のやうに美しい島か

げの間をぬふて、やがて、播磨灘から明石海峽をへて、大阪灣の難波の海へお進みになりました。

三月十日、皇軍は、難波の碕にご到着、川をさかのぼつて、生駒の山麓、河内の國日下邑の白肩津の濱にご上陸、四月九日、道を南にとつて、龍田ごえにご進軍あそばしましたが、道せまく、一たん軍をかへして、生駒山ごえに大和へおはいりあそばさうとなさいました。これを、孔舍衛坂にむかへたのが、長髄彦の大軍です。激戰はずゐしよに展開され、兩軍傷つきたふるるもの多く、流れる血しほは、山をさへ色どるかに見えました。

ご無念にも、皇兄彦五瀨命のおん肱に流矢があたつたのは、この戰の時です。

「日にま向かつて賊をうつは、天の道に逆ふところ、一たん退いて神をまつり、よろしく日の神を背におふてこそ、戰ふべきである。さうすれば、かならず、刃に血ぬらずして、賊は自ら敗れるであらう。」み軍をお召しあつめになつて、西におうつりあそばし、同日、草香津に入らせたまひました。そして、濱に盾を立てならべさせて、日のみ子おんみづから、皇軍をお勵ましあそばし、山野にひびけとばかり、雄たけびの聲をあげさせられました。盾津の名は、これによつたものであります。

五月八日、草香津から、み軍船をお進めあそばされて、茅渟の山城水門にご到着。この頃より、彦五瀬命の矢傷のおんいたみは、いよいよはげしく、命はみ劍をなでたまひ、「あゝ、大丈夫と生まれて、賤しき

惡者の矢傷をうけ、これに報いずして、空しく死することがあらうか。」とお叫びになりました。時の人、この所を名づけて雄水門といつてをります。

つひに進んで、紀伊の國竈山にいたります時に、全軍哀愁のうちに、命は薨去あそばされました。日のみ子の御悲歎をおもへば、まことにおそれ多いかぎりであります。命をその地に葬りたまひ、六月二十三日、皇軍は、その南、名草邑にご到着。ここで、女の豪族、名草戸畔と激戰あそばしました。なんなくこれをご平定、行く行く海邊の要地をおうちあそばしつつ、途中狹野をこえたまひ、南紀熊野神邑にご到着あそばしました。

絶壁

この熊野神邑には、天磐盾といふ、盾の形をした絶壁の大岩がありましたが、日のみ子は、この岩をこえたまひ、はるかに紀伊の各地をおのぞみになり、賊平定をお心におちかひあそばされました。

ふたたび、おほみ舟に召されて、ご東船のおん途中、大嵐ふきすさび、黒雲は海上一たいをおほひ、み軍船は、木の葉のやうにゆれにゆれ、大浪が荒れに荒れくるひました。

おほみ舟は、大浪の中にくつがへりさうです。この時、おん二番目の皇兄、稲氷命は、み舟の上にお立ちあそばし、

「あゝ、わが祖は天つ神、又おん母は海の神なるに、どうしてかうも陸にも海にも苦しめたまふのか。」と仰せたまひ、み劍を拔きはなちたまひ、海中に飛びおりたまひました。おかくれあそばした命は、やがて鋤持神となりたまふたとまうします。

しかし、荒れくるふ大浪は、まだ、やまうともいたしません。するとおん三番目の皇兄三毛入野命もまた、「わがおん母も、おん姨も、ともに海神である。どうして、かうも大浪を起して、大事なみ軍船を苦しめたまふのか。」と、荒浪におどり入つて、おかくれあそばしました。さしもの海上も、このおそれ多いご入水に、やうやく浪もしづまりました。

日のみ子は、三皇兄をことごとく失ひたまひ、皇子手研耳命とともに、さらに全軍をおまとめになり、熊野の國、荒坂津にご着船あそばされました。

荒坂津は、丹敷浦ともいひました。皇軍がご上陸あそばしますと、この地の豪族丹敷戸畔が手向かつてきました。荒海のご航海におつかれの皇軍も、勇を鼓して奮戰、つひに、首の戸畔を誅殺されましたが、しかし、殘黨はなほ多く、まだ〳〵逆つてまゐります。

皇軍のつかれは次第に加はり、その上、何かの毒氣にあつて、知らず知らずのうちに、うとうととふかい眠りにおちてしまひました。畏くも、天皇まで、お眠りあそばされました。賊は、いつ襲ふて來るかも知れず、まことに危險な場合となりました。

劍

この熊野に、高倉下といふ、いたつて心の正しい、土着の住民がゐました。ある夜、『韴靈』といふ御靈劍を、天つ神から、おくだしになつた夢を見、倉を開いてみると、正しくみ劍が、倉の屋根を

つきぬけて、板敷の上につつ立つてゐます。高倉下さまは、み劍をおしいただいてよろこび、大急ぎで、日のみ子のおん前に參上いたしました。すると不思議にも、日のみ子の眠りもさめ、全軍もまた目ざめて、勇躍、心を新たに奮ひたち、靈劍の力に、たちまち周圍の賊もほろびました。

皇軍の行くところ、つねに天照大神のおん守護があり、そして、いたるところで、この高倉下さまのやうな、忠誠の者があらはれるのでした。

み劍『韴靈』は、そのご、都を大和の橿原にお定めになつてから、その御殿のうちにお祀りになりましたが、第十代、崇神天皇の御代に、勅して、大和の石上に神社をご創建、み劍を御神體として、お祀り

あそばしました。官幣大社石上神宮であります。
　皇軍は熊野より、大和へ、ぞく〳〵とご進軍なさいました。山はいよ〳〵険しく、山又山、谷又谷、進むにしたがつて、ます〳〵道は困難となります。つひに方角さへお見うしなひあそばしました。
　するとその夜、おん夢に天照大神が、おんあらはれになつて、
「天つ神のみ子よ。ここより奥へは危険である。われ今、八咫烏をさしつかはすから、それを案内者として、このふかい山を進んで行かれるやうに。」と仰せられました。
　翌朝、日のみ子さまがお目ざめになると、はたして、八咫烏さまが、大きな翼を朝日にかがやかせて、大空から飛んでまゐりました。
　そのご、その飛び行くままにお進みになり、大伴氏の遠祖、日臣命

をご先鋒に、大久米部の大軍がつづいて、皇軍は、いく日かののち、大和の菟田穿邑にご到着になりました。日臣命は、この功により、あらたに道臣命といふ名をたまはりました。

光と影

　菟田には、兄猾、弟猾といふ兄弟が、この地の豪族として、すんでゐました。八月二日、八咫烏さまは、軍使として、帰順をすすめるために、二人をおとづれました。兄猾は、いきなり、八咫烏さまに矢を射かけました。だが、そのご、しばらくして、兄猾は何を考へたか、日のみ子の軍にまゐり、
「先ほどは、お使の鳥とも知らず、失禮いたしました。眞心をもつておつかへまうしたいとぞんじます。つきましては、新らしい家を建てて心ばかりのおもてなしをいたしたいとぞんじます。どうぞ、このお

願ひをお聞きとどけ下さいませ。」と、まことしやかにまうしあげました。日のみ子は、ご不審にお思ひあそばされましたが、その願ひを、おゆるしになりました。兄猾は、その日から、新らしい家を建てにかかりました。弟猾は、兄のすることがどうもわかりません。きつと、わけがあるにちがひないと、いろ〳〵さぐつてみますと、はたして、その家には、おそろしい押機をしかけてあるのです。

弟猾は、いろ〳〵兄を諫めましたが、兄はどうしても聞き入れません。仕方なく、弟猾は大急ぎで、日のみ子のところへまゐりました。そして、

「兄はおそろしい押機をしかけて、待うけてをります。どうか、その悪だくみをご承知のうへで、攻めほろぼして下さい。」

と、まうしあげました。

日のみ子は、弟猾の眞心をおほめになり、すぐ道臣命、大久米命を兄猾のところへ、おさし向けになりました。

「兄猾、自分の作つた家には、自分が先づはいるのだ。さうして、日のみ子を、おもてなしまうしあげる、そのもてなし方を、一つやつてみろ。」と、一人は劍を、一人は弓に矢をつがへて、ぢりぢりとつめよりました。兄猾は、あまりのおそろしさに、追ひまくられながら、家の中に逃げこんで行きましたが、とう〳〵、自分の作つた押機に打たれて、無慘な最後をとげました。

弟猾は、たくさんのご馳走を、獻上まうしあげ、配下をひきつれて皇軍に加はり、よろこばしいお祝の宴が開かれました。

　菟田の高城に鴫わな張る

の御製をたまはつたのはこの時で、これは、後世、久米舞のみ歌として、大伴氏にながくつたはりました。明治十一年よりこの方、宮中におかせられて、毎年紀元節に奏せしめたまふといふことであります。

道

紀元前三年九月五日、日のみ子、菟田高倉山におのぼりあそばされ、秋空に晴れわたる四方の樣子を、お國見あそばしました。

西の方一里ばかり彼方に國見岳、ここには八十梟帥の本據があります。女坂、男坂、墨坂に防備を嚴重にし、そのうしろの磐余邑には兄磯城の軍がみちみちて、大和の中部に出る道をすつかりふさいでゐました。日のみ子さまは、み心をなやましたまふて、いろ〳〵ご計略をおめぐらしあそばしてゐましたが、その夜の夢に、天つ神があらはれ

たまひ「天香山のみ社の中の土をとり、その土で天平瓮を八十枚、酒を入れる嚴瓮を作り、もつて天地の神々をお祭りまうせ。賊は自づと平定するであらう。」との、おつげがありました。このおつげは、弟猾のまうしあげましたことと、ぴつたりあひましたので、日のみ子さまも、大へんおよろこびあそばされて、さつそく、椎根津彦を軍使に、弟猾を道案内に、二人をそれ〳〵翁婆に姿をかへさせられて、天香山へおつかはしになりました。途中のいろ〳〵な困難を突破して、無事に埴土をおとり歸りになりました。さうして、天つ神のおつげのままに、丹生川上における『うつしいはひ』の大祭が行はれました。

祭

菟田川朝原における、水をまぜない飴。丹生における、嚴瓮の口を下に向けて川に沈めたまふと、やがて大小の魚が數知れず

うき上つた事實は、日のみ子さまの大御稜威の如何にかがやかしいものであつたかをしめすとともに、神國の意義をもしめしてゐます。ついで、日のみ子さまおんみづから、神そのものとならせたまひ、道臣命を祭主として、顯齋のおん儀を行はせたまひました。神人一如の一大ご信念を、おあらはし下さいましたことは、日のみ子さまのご聖業すなはち、神のみ業であること、み業はすべて神のみ意に出づるものなること、み國の大事のまへには、先づ神々をお祭りするといふ、日本古來のご信仰と、祭の精神とを拜察することが出來ます。まことに畏れ多いきはみとまうしあげねばなりません。

神々とも、まつたくご一體にあらせたまふ日のみ子さまは、いよいよ、紀元前三年十月一日、おん親ら、嚴瓮のご供物を召しあがらせら

れて、皇軍をお整へあそばされ、賊軍平定にご出陣あそばしました。忍坂大室屋のご計略、兄磯城ご追擊が、はじまりました。

卑怯

十一月七日、ふたたび八咫烏さまを軍使として、兄磯城の陣におつかはしになりました。弟磯城は、はやくから、ご歸順まうしあげてゐましたので、とも〴〵、兄磯城に、正しい道を說き聞かせましたが、かへつて「卑怯者」と、ののしられ、どうしても兄磯城はしたがひません。

やむなく、墨坂にこれを攻め、逃ぐるを追つて、つひに兄磯城はもちろん、兄倉下、弟倉下らを全滅せしめました。

大和平野に進み出た皇軍は、一月あまり追擊に追擊を加へて、西北方に行軍、めざす最後の強賊、長髓彥を十二月四日をもつて、總攻擊

あそばしました。

鵄　このたびは、日をおふての戰、ことに、この攻擊には、金鵄の加護もあり、勇戰力鬪、さすがの强賊も敵しかねて、どつとくづれました。

　饒速日命を、天つ神のみ子と信ずる長髓彦が、今、まことの天つ神のみ子の中でも、とりわけ尊い日のみ子さまにおあひまうして、おそれ畏みましたが、今日まで、强賊の頭として威をふるつてきた手まへにはかに歸順まうすこともと、ぐづぐづしてゐるうちに、改心の時機をうしなつてゐました。

　饒速日命は、一日もゆるがせにすべからざることを、とき聞かせましたが、まだ言を左右にしてゐますので、仕方なく、日のみ子さまの

ために長髓彦を斬りたまひ、全軍すべて、日のみ子さまの下に歸順せられました。その子孫は物部氏として、ながく皇室をお守りまうしあげました。

土　紀元前二年二月二十日からの、土蜘蛛狩りは、あひ手が弱敵であり、數も少く、これは、またたくまに全滅いたしました。

　三月七日、八紘一宇の大詔が渙發されました。畏きはみに、なみだぐみつつ、いよいよ臣下は一心一體となり、この月から、ただちに橿原宮ご造營がはじまりました。翌紀元前一年八月十日、媛蹈鞴五十鈴媛命を后の宮としてお迎へあそばすことになり、九月二十四日の佳き日に皇后とせられました。

　紀元元年一月一日、莊嚴なる御卽位の禮をあげさせられました。二

年二月二日、天皇は軍功を賞したまひ、それぞれ國造、縣主に任ぜられ、ご功臣には、それぞれ土地をたまふて、ふかくその勞を賞したまふたのであります。

陽

陽はうららかに、臣はそのところをえ、おほみ光の下に、幸福な日の國の基礎は出來あがりました。四年二月二十三日、天皇は、天照大神をはじめ、ご先祖の神々のご恩徳をお思召されて、鳥見の山中に、靈畤をおつくりになり、大孝の本をおしめしあそばされました。祭政一致の國體は、これに淵源し、神國の尊嚴もまた、ここに拜せられます。

以上は、雄大な日本書紀を、そのすぢを追ふて、ほんの、あらまし

のみ、まとめたものでありますから、なほ、ふかく研究していただかねばなりません。文中『日のみ子』としるさせていただきましたのは神武天皇のおんめぐみと、おん徳を仰ぐために、とくに、さうとなへまうしあげたためで、このおんよび名は、書紀にみえてをりません。

絕壁、劍、光と影、道、祭、卑怯、鵄、土、陽、紀の題目は、私の物語りの題名で、その出典の場所を、わかりやすくしたもので、これも書紀のものではありません。

書紀、古事記の原文も、ともに物語りのをはりにつけ加へました。あはせて、いくども、およみ下さい。

あとがき

1

『日のくに物語』のうち『劍』、は大和民族が、國史の上にあらはれて、第一にうけた試錬を書いたものであります。

すなはち、神武天皇を中心に、諸皇兄、諸皇子、そのほかに、大和民族が、老若男女、すべて、ご一行に加はり、九州から大和への、ご苦難のご東征を、敢然としてご遂行あそばした、火のやうにもえさかる一忠不亂のご事蹟の中から、主として私たちの祖先の物語をえらんだものであります。

ことに私は、この一册の中に、みなさんが今まで、あまりふかく考へなかつた物語、歴史家も、なるべくふれようとはしなかつた物語に力をおいてみました。それは、

一、高倉下を中心とする『劒』の考へ方

二、兄猾、兄磯城、長髓彦、土蜘蛛などの、いはゆる『まつろはぬ賊』と、
　弟猾、弟磯城などの歸順した人々との、心のへだたりと、ふかさの相違。

三、道にたいする一つの見方

四、祭にたいする考へ方

についてであります。

この點で、みなさんがお讀みになつた歴史の本とは、少しことなつた新らしい『物語』を、みなさんに讀んでいただけることと思ひます。そして、大君の御稜威が、さらに大きく、ひろく、ふかいものであること、民族の忠誠が、如何にはげしく、固いものであつたかも、知つていただけると思ひます。

2

各物語は、一つ一つ獨立したものではありますが、時と所と精神の流れの上に一すぢのつらなりをもつてゐます。『紀』において、國史をだいたい説明しておきましたから、それとあはせて讀んでいただきたいと思ひます。

『劔』は、全體から見て、一つの國史を語らうとしたものであり、一つ一つにおいて、日本精神を語らうとしたもので、この二つの目的が同時に、みなさんのものとなることを念願してゐます。

さらに『日のくに物語』は、

矛

駒

雷

とも、連絡をもつてゐます。

建國から奈良時代まで、國史のなかばに達するものであります。『日のくに物語』は、さらにつづくはずで、これは、私の一生の仕事として完結するやう、研究をすすめてをります。

お願ひいたします。

3

『劔』は、ほとんどを日本書紀と古事記によりました。ほかに十數冊の立派な本を參考として、あやまりのないやうに、つとめました。それらの本の名前は、完結の時にお知らせして、みなさんにも讀んでいただきたいと思つてをります。

4

神さまのお名前、土地の名前など、よみにくい、むづかしいところが多いことと思ひますが、辛抱づよく、眞面目に、おぼえていただき

たいと思ひます。ことに、各物語の最後にしるしました『原文』は、みなさんにはたうていわかるまいとは思ひますが、たゞ、そのままでもいい、聲高く朗讀して下さい。脈々としてせまる祖先の血を感じ、直接祖先とともにある想ひがします。

5

日の國は、今、未曾有の國難に直面してゐます。これを突破し、これをいや榮えしめるものは、みなさんをおいて、たれがありませう。今こそ、祖先のまことの姿をみつめ、まことの心にふれ、まことの力をうけつぐ時です。『劍』は、その意味で、私の最大の贈物として、心血をそそぎました。

起て！　心を一つにして。

大君に、生命をささげる朝です。

心からみなさんの健康を祈ります。

昭和十六年明治節のよき日に

中川靜村

昭和十七年七月十日初版印刷
昭和十七年七月十五日初版發行
（一〇、〇〇〇部ノ内第一刷五、〇〇〇部）

日の國物語〔劔〕

㊅定價 一圓五十錢 送料十五錢

著作者 中川（ナカガハ）靜村（セイソン）
東京市神田區東神田十番地

發行者 酒井久二郎
東京市小石川區柳町十九番地
（東東一三二〇）

印刷者 刈米（かりよね）窪
東京市小石川區柳町十九番地

印刷所 小石川印刷株式會社

發行所 東京市神田區東神田十番地
株式會社 淡海堂出版部
電話浪花一八六七番
振替東京一七八五五〇番

配給元 東京市神田區淡路町二丁目
日本出版配給株式會社

（會員登錄番號116513號）

科學の偉人物語

皆さんにおすゝめする面白い讀物!!

（B六判 函入 色刷口繪入 各冊定價一圓十錢 送料十五錢）

中川靜村著 北方開拓の勇者 間宮林藏

名高いクルーゼンステルンをして「日本人我れに勝てり」と呼ばしめた間宮林藏、北海の波と共に、今後幾千年も日本の國のある限り、生きて行く開拓の偉人間宮先生のこれは血のにじむやうな烈々たる愛國物語です。

冬野隆德著 科學日本の先覺者 伊能忠敬

日本の國防完成の爲に、老いの身に鞭打ち、日本全國を巡歴して、初めて正確な日本の實測圖を完成し、その正確、詳細なのに、世界の人々をびつくりさせた、科學日本の先覺者伊能忠敬先生の苦闘と感激の物語です。

長谷川央著 世界の大科學者 野口英世

これは、科學日本の光を、世界の隅々まで輝やかした野口英世博士の、不撓不屈の精神と、愛國の熱情に燃えて、その尊い一生を醫學の爲に捧げる感激の物語です。

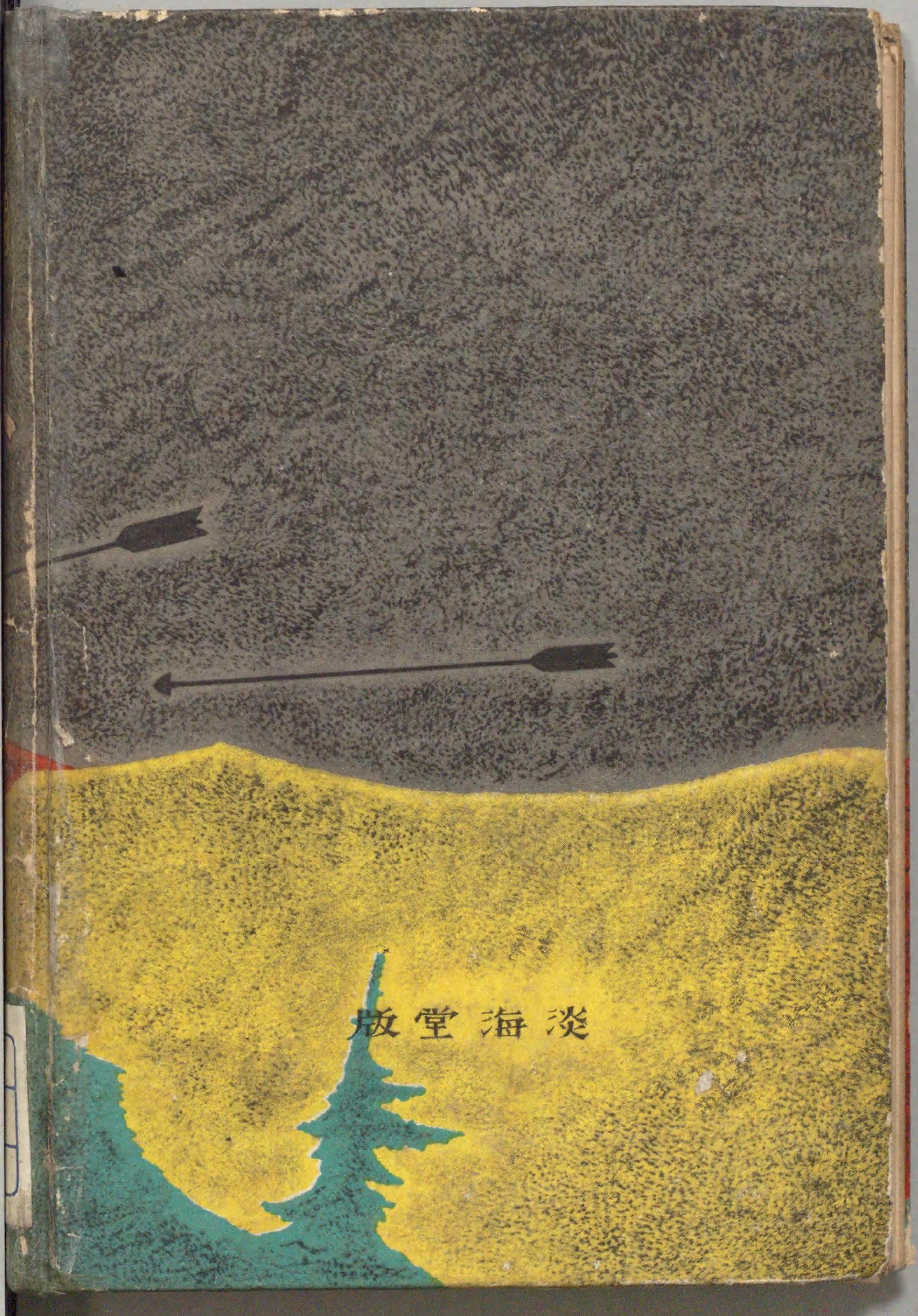
內田義廣著 空の大科學者 ツエッペリン

―飛行船が出來るとしたら、それは私のものだ―と叫んで、死の瞬間まで、科學の勝利を信じて、常に國家のため、人類のために、正しいと信ずる發明の道をまつしぐらに進んで、遂に、空の王者として讃へられるにいたつたツエツペリンとはどんな人でせうか。

鹽野筍三著 昆蟲の大科學者 フアブル

皆さんに親しまれてゐるフアブルをぢさんは、どんな人だつたでせう。自然に對しては、つつましやかな心で接し、昆蟲に對しては、あふれるやうな愛情をかたむけて觀察した、温かい昆蟲學者フアブルの、愛と詩の生涯の物語です。

952
89


淡海堂版